

ボンクラ夫婦の
バンクラ日記

岩下八司・啓子

目次

まえがき

8

第一章 自由奔放、青春時代

丹波篠山に生まれて

12

じいさん、ばあさんと尾道

15

再び篠山へ帰る

16

整備工として働き始める

19

尾道に戻り、大阪に向かう

21

寅さんのような日々

22

旅から旅へ

23

第二章 世界を見る

運送業への転身

28

26歳での結婚

30

母の誘い

32

現地で働く日本人女性

35

何かを感じなさい

36

友達を連れての旅ガラス

38

フィリピン、モンゴル、ラオスへ

39

第三章 バングラデシュとの出会い

アパートの住人

44

世界で最も貧しい国
バングラデシュ支援の道へ
自宅を売って鑄物会社へ
広島県三次市との縁
妻と別れ、会社と別れ

第四章 啓子の半生

あんなだけあかん子
体重との戦い
家業と借金を継ぐ
お見合い100回の日々

第五章 新たな支援の歩み

再婚の決断
不良牧師をサポートする
エルセラーンと学校建設
石田くんとたかちゃん
2015年の脅迫事件
バングラデシュの変化
男性社会からの脱却

あとがき

92 86 84 80 78 76 72 70 66 65 63 60 56 54 52 49 45

まえがき

ぼくの名前は岩下八司やっしです。1949年生まれ。今年76歳になりました。

現在、ぼくと妻の啓子は、兵庫県丹波篠山市で「NPO法人P・U・S JAPAN（バン格拉デシユの村を良くする会）」を運営しています。その拠点となっているのが篠山の二階町にある「だいじょうぶ屋」。啓子がネパールなどで仕入れてきた衣料品と、ぼ

くがつくるバン格拉デシユカレーのお店です。P・U・Sの拠点にもなっています。

1985年に初めてバン格拉デシユを訪れて以来、40年にわたって現地の子どもたちへの教育支援が続けてきました。これまでバン格拉デシユに建てた学校は47校。3万人以上の生徒が通っています。里親制度（支援者が里親として特定の子供の就学を支える仕組み）を通じて、現地の女子中学生や職業訓練生への援助も行っています。

と言うと、えらい立派な人間のように聞こえるかもしれませんが、ぜんぜん違います（笑）。むしろ好き勝手に生きています。バン格拉デシユの支援も好きでやっていること。思い返せば小さい頃からそうできて、中学も中退したようなもんで、それから整備工として働いたり、的屋みたいなことをしたり、運送屋をやってみたり。お酒も飲むし、女遊びもする。好きなように生きてきました。

そんなぼくの人生が大きく変わったのは1980年代の初頭、30を過ぎてからです。母親に誘われてネパールを訪れたことがきっかけでした。

「わずか1日足らず離れたところに、こんな生活しとる人がおるんやな」

その衝撃が、ぼくの人生を変えました。

それから、家の向かいのアパートに暮らすバングラデシュ人たちとの出会いがあり、彼らの国に学校を建てようと奔走するようになりました。自宅を売ってお金に換え、社宅のある会社に転職したりもしました。1996年にはバングラデシュのボロレカ村に「関西ハカルキ中学校」を開校。ぼくらがバングラデシュで建てた最初の学校となりました。

おかげさまで講演会とか新聞、テレビなんかでぼくらの活動を知ってくれている人も増えました。夫婦で取り上げてもらうことが多いので、ずっと二人三脚でやってきたと思われるんですが、ちよつと違うんです。ぼくと啓子が結婚したのは2005年、お互い56歳の時です。

啓子は100回も見合いをして、うまくいかなかったそうで、ぼくはというと30年連れ添った妻がいて、ほかに彼女もいてまして、それなのに「あなたと結婚する」って言うて結婚してしまっただんです。ちよつとお酒も入つとつたと思うんですけど……。

それから活動が一気に広がりました。啓子は一人でもどんどん進んで行きよりですから。2013年にNPO法人として認可を受け、2015年頃からはエルセラーン化粧品株式会社とのパートナーシップで学校建設が加速しました。

ここ数年は女子教育に力を入れています。バングラデシュでは、まだまだ女の子が早くに結婚させられたり、教育の機会を奪われたりすることが多いからです。一方で村の親たちの意識も、30年以上かけて少しずつ変わってきています。今こそ、というタイミングです。ぼくが生きてる間に、女性の社会進出が当たり前になる社会になったらええなと思っっています。それが、ぼくの最後の目標です。

この本は、そんなぼくと啓子の気ままな半生のお話です。いろんな失敗もしました。騙されたこともあります。けど、支援は続けてきました。動いたら何かが起こる。それをずっと信じてやってきました。まあ、読んでみてください。

第一章 自由奔放、青春時代

丹波篠山に生まれて

ぼくは1949年、兵庫県の丹波篠山で生まれました。

へ丹波篠山 山家の猿が 花のお江戸で芝居する

デカンショ節の一節で歌われた山村です。母親は高校教師をしていました。職業婦人というやつです。市川房江とか、そういう女性の運動に関心があったんでしょう。

当時は、女の子が勉強する科目があんまりなかったんです。ほんで初めて、篠山の学校に家政科というのができて、そこに赴任したという感じでした。料理とか縫い物とか、そういうのを教える科目です。学校の名前は変わってるけど、今も続いています。

親父は鹿児島出身で、母とは大学生の頃から付き合いがあったそうです。亡くなった前妻との間に二人子供がおり、母はその子らを育てないと、という気持ちで結婚をしたそうです。

親父はほとんど家にいませんでした。どんな仕事をしていたか、詳しくは知りません。何か山師みたいな、山を買うたり売ったりするような仕事やったようです。そうした商いの全盛期やってみたみたいで、山の木を切って売るとかしていたようです。ぼくは子ども心に、親父は一緒に住まない人やと思っていました。

鹿児島の田舎から出てきて、東京の大学へ行っただくらいやから、親父は地元ではなか

なかの名士やっただんでしょう。戦前の話ですから、すごいことです。せやけど、そんなできた人のはずやのに、遊び人でもあったんです。まあ、女好きやっただんやうで……。あちこちに妾をつくるわ、子どもをつくるわ。

それで甲斐性があったらいいんですけどね。もともと商売人の家に育ったわけぢやいませしね、頭で考えて商売やっただんやろうけど、うまいこといかなかったようです。そやから、うちの母親のところによろ借金取りが来とりました。

親父の連れ子は娘と息子、二人おりました。やがて母との間に女の子が生まれて、それからぼくが生まれた。家には四人の子どもがいたわけです。

義兄のほうはある日、ポーンと家を飛び出して完全に行方不明になりました。やつぱり腹違いの母親とかが合わんかったんやろうと思います。義理の姉は、ぼくや姉の面倒をようみてくれて、おんぶしたりして学校へ通ったりしました。

じいさん、ばあさんと尾道

3歳の頃から中学2年までは、広島県の尾道で暮らしました。母方の祖父に預けられたんです。祖母はもともと篠山の出身なんやけど、戦争中に尾道に疎開してたんです。郊外のまあ、そこそこの家でした。

当時はまだまだすべての品物が手に入らず、おばあちゃんは毎日毎日内職をしていたのを、はつきりと憶えています。ぼくのように、両親から離れて祖母のもとで暮らしている子どももたくさんおりました。口減らしみたいなものな。それと、女の人が職業をもっていると、とくにそないなりますわな。戦争で亡くなった人も多かったです。そういうのもあったんやろうと思います。

参観日や運動会にはいつも祖父が来てくれました。けど、子ども心に、なぜ友達の両親は若いのに……と、いじけたこともありました。そういう寂しさは、確かにありました。

祖父母の口癖は「損して得とれ」「負けるが勝ち」。とにかく「男はやりかけたら諦めずとことんやれ」と言われながら幼少期を過ごしました。今でも、その言葉は心に残っています。

「産みの親より育ての親」とよく聞きますが、祖父母の愛情は素晴らしいものでした。人を愛する心を教えてくれたんやと思います。

再び篠山へ帰る

中学2年生の時、母親のもとへ戻ることになりました。それは憧れでもありません。母親像を自分なりにイメージして、親のところまで一緒に住みたいなと思っていました。けれど、篠山に帰ってきて思ったのは、確かに何でも買ってくれて、何でもやらしてくれただけでも、やっぱり、じいさん、ばあさんの愛情と違うということでした。そんなでぼくは一時、母親に反発してましたな。

その時の家族構成は、母親とぼくと実姉の三人でした。親父の連れ子の義姉は篠山におったけど、家を出て別に住んでました。親父は、ほとんど会うたことはありません。

家出したこともあります。あれはちょっと、今でも思い出しますな。

正月の1日に友達と「遊びに行こか」と家を出ました。それが結局、家出になってしまったんです。捕まってもうたけどな、2〜3日で。

青森まで遊びに行けたんです。転校して入った中学の友達と二人でした。ぼくが5万円ほど家から持ち出したんです。親が先生、教師をしとったから、いろんな預かった金とか何かあったんやろうな。ぼくらは夢中になつとるから、今考えても何にもわからんけど、あるだけ全部持っていったという感じでした。当時の5万円いうたら、今の50万円くらいの価値があったんちゃうかなあ。

東京で降りて「東京で服買おうか」とか言うて、何か買うて、ほんで寝台列車で青森まで行きました。結構遊べましたな。60年代いうても、東京なんかはもう、いろんなも

んがありました。

青森の駅でずーっと寝たり起きたり。「これでうどん1杯しか食えんなあ」とか「どっかで働こか」と話してました。盗みやカツアゲはせんかったけど、金がなくなってきたんです。で、職安で何やかんやしたら、そっから通報があつて捕まりました。

そこで事件を起こしてたらあれやけど、そこはする気はなかったんです。せやけど、青森まで親が迎えに来てくれました。未成年やったからな。ぼくの母親と、もう一人一緒に行つた子の父親と、二人で迎えに来たんです。

その時、ぼくは15歳くらいやったと思います。1963〜64年頃ですな。昔はな、元旦は登校日になつてたんです。そこに出てけえへんとなつて、大騒ぎになつたわけです。不思議なことに、その一緒に行つた友達とは、6〜7年前につながるようになって、今、横浜に住んでいます。そいつは今、中小企業診断士いうのになつてます。

整備工として働き始める

中学2年で篠山に戻つて来て、1年半くらいは篠山の中学校に行きました。尾道で過ごした小学校と中学校の1年半という短い時間やから、友達との縁はあんまりありません。ちよつと悪いこととして遊んでた友達も、記憶に今でもあるなあというのは、二〜三人くらいのもんです。

学生時代の思い出は、あんまりないですな。高校とか大学に行つてたら、同級生もたくさんいるやろうし、同窓会の誘いなんかもあるんやろけど、ぼくはその同窓会いうのに、1回も呼ばれたことがありません。

中学3年の時、ぼくは決断しました。勉強は嫌いやったから、この先、上の学校へ進んでも、辞めてしまふやろう。せやからもう、社会に出ようと決めたんです。クラスの中で半分弱は就職組でした。そういう時代やつたんです。

ぼくは車が好きやつたんですよ。車をいじつたり何やかんや。ほんで、地元篠山の修

理工場で、修理工の見習いとして働くようになりました。で一応、整備士免許を取って、20歳の時に篠山を離れたという感じです。

うちの母親は我慢強い人で、何が何でもという教育ママではなかったし、優しい人でした。特に反対もしませんでした。後で聞いた話では、親父は嘆いとったそうです。息子が……。ほら、自分が大学まで行ってるので、こいつ中学出て、社会に出て生きていけるんかいなと心配したんやろうと思います。

整備工場では、結構真面目やったと思います。とにかくいろんな車の直し方を覚えたいなと思っていました。勉強は嫌いやったけど、体を動かしてお金を稼ぐのは全然苦じゃなかったです。まあ、油にまみれながらやってました。約5年間、20歳くらいまで働きました。

尾道に戻り、大阪に向かう

20歳の時、ぼくはポーンと母親のもとを出て、祖父母のところに戻ることにしました。尾道にです。

まあ、母親のイメージが描いてたものと違ったし、やっぱり尾道も、いうてもそこそこの土地やったから、ちよつとじいさん、ばあさんのそばにいたいなと思っただんです。尾道では、ちよこちよこアルバイトみたいなことをやりました。建設会社の仕事とか、車が好きやったから、そのダンプカーとかちよつと乗ったりとか。当時、日当って5000円くらいやったんと違うかな。そう考えると、家出した時に持ち出した5万円の貴重さが、今さらながら染み入りますな。

ほんでも2年くらいしたらまた出ました。篠山の遊び仲間が「大阪来たらなんぼでも仕事があつて稼げるぞ」と言うので、それやったら行こかと思っただんです。ちよつど万博がやるか終わるか、そんなときやったと思います。大阪の枚方に行つて、その友達と

一緒にいろんなことをやりかけたという感じですよ。

寅さんのような日々

枚方で、ぼくはその友達と的屋のようなことをしてたんです。

靴を売ってました。縁日とか、休みの店の前を借りたりとか、いろんなところに行つて売ってました。まるで寅さんです。親方がおるわけでもありません。二人だけでやりました。もともと、その友達の親父が篠山で靴屋をやつとつたんです。その靴を大阪で売るみたいなきことから始めました。

売つてた靴は、ケミカルが多かったです。女もんです。靴の町で知られる、神戸の長田による仕入れに行きました。

ケミカルのは長田が一番やつたんです。せやけど、靴底がポンポンとめくれたり

とか、サイズ違いとか、そんなんばつかり買うんです。片一方は23センチやけど、もう片一方は23・5とか。そういうのを安く手に入れて、売るのは口次第やから、「ちよつとくらい右左大きさ違っても大丈夫ですよ！」とか言うて売るわけです。

横流し品とかサンプリ品とかもありました。サイズは23しかないねんけど、安う流れて来たりするんです。まあ、バッタもんやな。

友達はまだ、売り方が上手で、ほんまに寅さんみたいやつたんです。天職やと思いましたが。大きな声を出して「こんなん安いよ」とか、大きな声をずーつと出しよつたんです。ぼくはあきませんでした。声出すのも苦手、なかなか売れませんでした。

旅から旅へ

ずーつと近畿一円、いろいろあちこち。旅から旅みたいな感じでしたな。軽トラで下に敷く台とか積んで、日帰りで商売しました。

1970年代の話です。百貨店の横にある空き地で出したりとか、商店街でも出しました。火曜日が休みの散髪屋、その前にちよつと金を払って使わしてもらうとか。

トラブルもありました。近所に靴屋があつて文句言われるとか。路上でやつてるつてことで警察が来ることもあつた。駐車違反の扱いになりました。二人でやつつたから、一人が警察に行つとる間に、一人が商売したりして。最初は警告とかで、そのうち罰金までいったりもしたけど、まあたいしたもんでなかつたです。

出す場所によつたら、的屋の集まりの神農会が言うてきたりすることもありました。お金渡しとかなあかん。そしたらもう何も言えへん。ほんで、そういうところは安心や。神農会が仕切つて、場所を確保してるからな。

そういう人らと話をしたら、昼から麻雀に誘われることもありました。ぼくのツレは博打が好きやつてな、「ちよつと行つてくるわ」言うて……。

そいつは競馬も好きで、よう一緒に行きました。阪神競馬場に京都競馬場。「小倉やつたら儲かるで」言うて、福岡の小倉まで競馬しに行つて、お金なくなつてしもたことも

あります。

ほんでこのままやつたら帰ることもできひんから、とりあえず下関まで行つて漁師にでもなろうつてことになつてね。この時代は突然押しかけても、使つてくれたんですよ。下関には1か月くらいおつたけど、漁に出たんは何日かしかなかつた。海が荒れてて、沖に出てもガソリンがもつたいないだけや、とかな。そんなことがあつて。漁に出てもぼくは船に酔うて、ゲーゲーして、仕事、ろくにできへんかつたんです。

それでバイト代を前借りして、そのまま逃げてきた。まあ元気でな、すごい相棒でした。昭和のドラマ、映画みたいな、トラック野郎みたいな感じの生活でした。その時は、毎日が楽しかつたらそれでええと思つとつたんです。何も考えてませんでした。自分がこうなりたいとか何とかかんとか、そんなんは全然なかつたです。

女性関係もまあ派手やつたと思います。よう遊びに行きよつたな。神戸やつたら福原、尼崎の初島新地とか神崎新地、大阪の飛田新地とか。当時4〜500円やつた。泊まりで1500円や。ぼくが自動車整備工をやつてるときの給料が月に6000円くらいや

つたから、1回500円いうたら、ええ値やったと思います。せやから淋病もようもらいました。そういう時代でしたな。

そんな生活が5〜6年続きました。22歳くらいから27〜28歳までです。

第二章 世界を見る

運送業への転身

楽しい暮らしが5〜6年続いたんですが、その後、仕事が変わりました。

たまたまそのツレの義理の兄貴というのが、車を持ち込みでヒューム管を運んでたんで

す。そいつが免許を取り消しになったんか、120日の免停になったんやったかな。ほんで「バイトでもええからちよつと乗ってくれへんかな……」って頼まれた。ほんで一生懸命、ヒューム管を運んどりました。

ヒューム管ってわかりますか？ コンクリート製の円筒物です。大きいから小さいのから、全部自分で降ろすんやから、結構大変な仕事でした。トラックのボディを上げて、バールでゴーンゴーンと転がしていくねん。ウインチを緩めながら、コロコロコロと転がしていく。それを結構やりました。

結局、その義理の兄貴が「もういらんから、お前これやれや」とかいうから、引き継いでやることになりました。運送屋やな。その頃は名義貸し、ナンバー貸しいうの、なんぼでもあった。月になんぼか手数料を払うて。

だいたいぼくは車が好きやったから、運転は苦にならんかったし面白かったです。そのうち二人ほど雇って、親方みたいな感じでした。当時でも月に120〜130万は売上がありました。

26歳での結婚

ぼくは26歳のときに結婚しました。もう靴屋を辞めて、運送屋をやっていました。嫁さんもたまに、横にトラックに乗った。

出身は熊本でした。大阪のどこやったかな、ズーッと靴を売り歩いているときに、お客さんとして来た人でした。年齢は後で気がついたけど、ぼくより三つか四つ上やったんです。

そこで初めて、安定した人生に変わりました。商いもうまいこといったし、26歳で結婚して、家庭を持ったという感じですよ。せやけど、子どもはできんかったんです。その時に子どもでもできてたら、ぼくの人生も変わってたかもしれないけど……。

運送屋は7、8年やったかな、そこそこやりました。その頃は、冷めた夫婦だったけど、幸せな生活やったと思います。長距離でないから1日で終わるんですわ。帰ってきて、酒飲んで、女買って、みたいな享樂的な感じはまだ続いてました。

親父は、確かぼくが枚方におる26、27歳の時に熊本で亡くなったと聞きました。妾の家で死んだんです。温泉旅館の女将やったらしい。そこでズーッと居候しとったんちゃいますか。

実の姉が、親父の性格とまったく同じで、親父のDNAはとにかく短気で下手に中途半端に頭ええから、むずかしいこというし、常に竹刀を横に置いとるような人やったんです。殴られたこともあります。ぼくはどっちかというと、母親と同じおっとりした性格やし……末っ子長男ですからな。

せやから実の姉とは長く会ってないんです。義理のお姉さん、親父の連れ子の方とはありますけど。岡山におって、たまに遊びに行きます。その姉が80歳超えてるから、元氣なうちに、いろいろ聞いときたいと思ってな。親父がどんな人やったとか、妾の娘がどんな奴やとか、義理の兄弟やしな。その子とも、今になって会ってみたいと思うんです。

たまに篠山に帰ったりもしました。それでも相変わらず、こんなことやっとるわいう

て、すぐ帰ったりとか、そんな感じでした。泊まったことはなかったです。

母親はクリスマスチャンやっただんです。わりと熱心だね。ほんで家でクリスマスチャンの集会とかやってたりした。でもぜんぜん興味なかったですわ。

バングラデシユに行く人生なんてまったく、まだかすりもしてませんでした。まったく何にも思っていなかった。ところがです……。

母の誘い

海外に初めて行ったのは、1980年代の初め頃、ネパールでした。正確な年は覚えてないんですけど、NPOのパンフレットに「1985年12月バングラデシユに初めて訪問」と書いてあるから、ネパールはそれより数年前やっただと思います。

母親がずっとネパールやフィリピンの支援活動をしていて、留學生の世話なんかもし

てました。篠山の家に1年ほどネパールからの研修生を受け入れて、ホームステイさせてたこともあったんです。

そのときぼくは「外国人と一緒に住んで大丈夫かい？」って言うくらいでした。何も知識がなかった。

PHD協会という団体があって、母親はその活動に関わってました。ネパールを中心に長く医療活動を行ってきた岩村昇先生が立ち上げた団体です。その第1期の研修生ということでした。サライさんという子がうちに来てたんです。

それで母親はネパールへのスタディツアーをやったから「あんたも来い」って誘われたんです。姉も誘われました。何か知らんけど、それもええかなと思って。何か一瞬、気の迷いやな。ほんま、何も知らんし、どこらにある国とかもわかってなかったけど、行くことにしたわけです。

当時、海外旅行って、猫も杓子も行く感じではなかったです。ハワイとか韓国、組合の旅行いうて済州島で、女を買いに行くツアーとか、そういう時代やっただと思います。ぼ

くにとつては初めての海外で、パスポートも取りに行きました。

海外に行ってみようというより、母親がやつてゐることに何となく興味があつたのかな。母親が旅費やら一切全部出してくれるつて言うとするし、そこまで熱心に言うからな。何か知らんけどその時にふつと、のせられたというか……。

最初に行った時は、PHDのスタディツアーで15〜16人おつたんちやうかな。団体の事務局長がリーダーでついてました。往々にしてこういうグループのツアーというのは固いところがありますわ。「これはスタディツアーやから、遊びとちやう」とかな。ぼくはそんなこと一つも考えてへんからな。

学校見学に行つたり、編み物をやつとるグループを見に行つたりしました。初めての海外は10日間くらいやつたと思います。

当時のネパールは安宿というか、バックパッカーの欧米人らがたむろしてゐるようなところがようけがありました。ほんまの安宿、ござを敷いてあるだけのところで、100円とか150円出したら布団がついてたとか、そんな時代でした。

ぼくツアーで行つてたんやけど、暗くなつてから一人でぶらぶら出かけてみたら、泊つてるホテルがわからへんようになりましてん。ほんでもうええわ、てなつて、安宿に飛び込んで泊まりました。ツアーの人らは大騒ぎになつとつたらしいけど。最初からそんな風やつたです。

現地で働く日本人女性

このスタディツアーでとくに心を打たれたことがありました。パピルの丘つていう幼稚園があつて、園長さんが日本人の女性やつたんです。60超えた方でした。そこに見学も行って、日本の若い子もそこで働いとつたんです。

ぼくはすごいなあ思いました。当時のぼくは感覚からしたら、日本人でわざわざこんな国で……。カルチャーショックで言うのかな、そういう感じがありました。

やっぱり、現地の人と出会うとワーツと思うやろうけど、同じ日本人がその中にいるっていうのは驚きました。

幼稚園は首都カトマンズの郊外やったかな。学校も満足にない時代やから、そこで子どもの育児とか勉強に力を入れてるお婆さんもおったんやな、今考えると。

せやけどやっぱり、当時は教育支援もあれやったけど、公衆道徳とか保健衛生な。今でもなかなか抜けへんけども、ゴミでも何でも拾って片づける習慣がないんです。そこにポイポイ、学校でも子供らが当たり前のようにほかしよるからな。

それ見て「へえ」と思っで、また行こうと思っただんですよ。

何かを感じなさい

何か、キリスト教とかクリスチャンとか、それと何か不思議なつながりがあるんやなと思います。岩村先生もクリスチャンやったんですけどね。えらかったですわ。ぼく

には一切、宗教の話とか、聖書を見とつても、一言も何にも言わんかったです。ただ黙々と自分で……。まああれこそほんまに、語らずして語るというか、自分の生きざまで見せるような人やったんやろうなと思います。

何かを感じなさい……。ということやろうな、今考えると。具体的にああせえ、こうせえとは言わへんけど。現地に行っで、やっぱり自分で体験すると、何か感じるものがあったんです。

あの時、行っでなかつたら、自分が途上国の支援活動をやってるかどうかわからんなと、今でも思います。

行っで、やっぱり面白いなと思っただんです。わずか1日足らず離れたところに、こんな生活してる人があるんやなと思っただんです。厳しい状況を現実で見るとな、何かお手伝いできへんかなという気持ちになりました。これはやっぱり、自分の快樂だけで生きとつたらいかんわ思っただんです。

帰っできて、嫁さんは何も言わんかったです。勝手にせえ、みたいな感じでした。

友達を連れての旅ガラス

それからぼくは毎年のように、ネパールに行くようになりました。姉も何回目かの時に一緒に行ったことはあります。で、ツアー以外にも遊びに行ったりもしたとつたしな。もうツアーで行っても面白くないなと思って、仕事仲間二〜三人で行くようになりました。自由に動けるから。スタディツアーやと「行こか？」いうて行かれへんし。行き当たりばつたりの方が面白いわつていう人と行つたんです。

現地で友達もできて、家で寝泊まりさせてもらつたりしりました。あんまりネパールではホテルに泊まつた記憶がありません。

後に通うようになるバン格拉デシュでもそうなんですけど、ネパールでも「おもてなし」の気持ち、日本人では考えられんくらいあるんです。向こうの人はお腹がパンクするくらいご飯を出してくれます。そういう文化なんですよ。

まあでも、そんな旅やから何かの支援というものではないです。観光。ネパールの国中あちこち、泊まらせてもろてる家の近辺だけちゃう。ちよつとあつちの方へ行くわ言うて、バスで一日も二日もかけて行つたりとか。せやから、ネパールの北から東まではだいたい行きました。

コミュニケーションは、「ナマステ」だけ。ネパールの友達日本語をしゃべつてたから。そいつと知りあつたのは、元々、神戸学院大学に留学してて日本に住んでた。ほんで「今度また、ネパールへ来てや」言うて。で、カトマンズに住んでたから、日本語は別に不自由しなかつたです。

フィリピン、モンゴル、ラオスへ

一度フィリピンにも行きました。母親がフィリピンでも支援活動をしつたから。

その時にはぼくも、積極的に行ってみたいなという気になつたんです。母親が現地の子どもの里親になつとんねんとか、その子どもに会いに行くねんて言うててね。で、

母親と行きました。

年に1回、伝達式いうて、奨学金を渡すセレモニーがありました。ぼくが行った時はちょうどマルコス政権が倒れる年やった。アキノが立候補するいうてな。黄色いTシャツがシンボルや。それですごい町の中がひっくりかえっとった。

マルコスとイメルダいう嫁さんが悪かったんや。その行った年の次の総選挙でマルコスが辞めた。1986年の大統領総選挙をきっかけに崩壊したから、86年にフィリピンへ行つとることになりますね。このあたりの記憶はごちやごちやでようわからんのですわ(笑)。

フィリピンで世話してたんは西本神父いうて、神父さんが全部仕切つた。でも団体はネパールとはまったく別で、京都のマイセハいうとこでした。

フィリピンは結局その1回だけでした。何でなんかなあ。最初のネパールのシヨックが大きかったからかな。当時は巨大なゴミの山とスラム街のスモーカー・マウンテンがあつて、衝撃を受けたりもしたんやけど、それでも最初に見たネパールの印象というのは抜けへんかった。

この頃にバングラデシュにも行つてるですけどね、ほかにもあちこち行つてるんですよ。モンゴルに行つたり、ラオスに行つたり。

ラオスはバングラデシュの支援活動を始める前でした。いろんな国を見て、いろんな人と出会つて、そういう経験がその後の活動につながつていったんやと思います。

モンゴルは、住谷さんという枚方の飲み仲間と一緒に行きました。2週間くらいおつたかな。その頃はもうバングラデシュ支援をしてました。

日本にいるバングラ人の知り合いが、モンゴルで会社をつくつてたんです。そんで「イワシタさん、ちよつとモンゴルで、そいつらの状況とか見てきてくれへんかな」と。ほんなら行つたるわと…、遊びがてらにモンゴル行つてきた。

ほんでその工場で何日かおつて、あとはずっと旅して。最初バイクで旅しようと思つたけど、バイクも結構、山の中走るとな、大草原やけど結構。パカッと穴があいてて、転倒して。それやったら馬の方がええやろいうてな。ぼくは馬に乗るんは好きやったから。

人の役に立とうとか、そんな気持ちなんて全然ない、好奇心だけで旅をしていました。ほとんどが行き当たりばったり。でもなんとかなった。どっちかというと自分が助けてもらってましたね。

第三章 バングラデシュとの出会い

アパートの住人

1984年頃だと思っています。バングラデシュの若者たちと出会いました。ぼくが住んでいた枚方の家の前です。当時はバブル絶頂期やから、いろんな国から研修生が来とり

ました。なかには日本語が話せるバングラデシュ人もおって、いろいろ日本での仕事とか住まいを手配しよったんです。

それで突然、家の前のアパートにバングラデシュ人が住みはじめたんです。五、六人もちろん最初はどこの国の人間かわからへん。顔を見たら、ネパール人かなあ。アパートの前でたむろしてたんで話かけてみたら「バングラデシュ」と。一人、ムキットという日本語が話せる男がおったんです。

彼が「わたしの村を一度、見てほしい」って言うてね。ほんなら1回行ってみよかとなりました。ネパールに何度も行ったりして、海外のことには慣れてきとったから、バングラデシュという国にも興味が湧きました。同じアジアやし、行ってみたいなと思っただんです。それで翌年、バングラデシュに向かいました。ムキットのメッセージを8ミリカメラで撮影して、ビデオごと持っていきました。

世界で最も貧しい国

初めてバングラデシュに行った時のことは、今でも鮮明に覚えています。

ネパールとは違う、独特の雰囲気がありました。人の多さ、土地の狭さ、そして貧しさ。厳しい状況の現実で見るとな、何かお手伝いできへんかなという気持ちになりました。これはやっぱり、やっぱり、自分の快樂だけで生きとつたらいかんわって思っただんです。

首都ダッカからバスに揺られること半日。ムキットの故郷であるポロレカ村はさらに厳しいものでした。食べもんにしても、台所にしても……すべてが貧しかったんです。その時は、外から見えるもんでしか判断はすることはできひんけど、それでも何かせなあかんと思いました。

ネパールで感じたことが、バングラデシュではもつと強くなりました。

貧しい暮らしの中でも、客人をもてなす心は忘れへん。ぼくの旅はいつもそんな人たちに恵まれてきました。世界最貧国と言われたバングラデシュの小さな村でもそうでした。ポロレカ村でホームステイをする時、こちらはお客さんやから、村の人たちは精一杯のもてなしをしてくれました。お客さんには一番いいものを出すのが向こうの習慣です。鳥にしても、ヤギにしても魚にしても、普段は食べることでできないご馳走を、わざわざぼくらのために用意してくれるんです。

せやけど、その子らは普段そんなもの食べてへんのです。穴からじつとこつちを覗いたりしてるのを見ると、「いやあ申し訳ないな」と思いました。もうぼくらのためにな。自分らの子供らは食べたいやろうけど、もうぼくらだけ食べてええんかいな、と。

向こうのおもてなしの文化では、家族と一緒にご飯を食べることはありません。お客さんはお客さんとして接待されて食べるという感じですよ。男の人は一緒に話をしますが、女の人は決して同席しません。子供も一緒に食べることはないんです。

ぼくら二三人でホームステイしてた時でも、その家の奥さんとか、働いている人とか、いろいろ女の人もおるけど、一緒にご飯を食べたことは一回もありません。同席

するのは、そこのご主人だけです。家族は、お客さんのツアーの人が食べ終わってから、後で食べてるんです。

普段のカレーは、具がほとんど入っていません。小さい一番安い魚と一緒にカレーにしたりとか、メダカみたいな魚です。それか野菜だけ。ジャガイモとか、そこの庭に生えているような草で炊いたりとか。野菜の葉っぱをつぶしたやつをペースト状にしてご飯に混ぜて食べるとか、そんなもんです。

肉が主役のカレーなんて、もうあんなのは日本だけです。ぼくらは、もうあんなのは、あんな感じが出たことはありません。カレーをガーツとよそつてくれるんやけど、肉はひとかけらだけ。あとはどろっとした汁気です。それを大きな丼鉢に入れて、ポンと出してくれます。そんでご飯にこねて食べるわけです。好きなだけ食べたらいえんやけど、最初からカレーだけ。肉を山盛りで持つてつていうことはまずありません。

お風呂は、バケツに湯を汲んできてくれて、それで体を拭くだけです。元気な子は池へ飛び込むんやけど。

ぼくらが訪ねるのは1月・2月が多いんです。朝晩は冷える。向こうの人は風呂は朝いたいお昼の2時頃なんです。1回だけ。2時頃になったらわりと暖かなるから。

ぼくは行ったらいつも2時頃とか3時頃に、池で体洗うたりしてました。手漕ぎのポンプで、向こうの子供が一生懸命漕いでくれるんです。ほんでシャワー代わりに流してね。シャワーが出るといことは電気があるということやから。電気のない家もようけあるから。やから薪で大きな鍋で湯を沸かしてくれて、それを水でちよつと薄めて、適当な温度に合わせて使うんです。

そうした現実を目の当たりにして、体感して、思いを行動に移していきました。

バン格拉デシュ支援の道へ

日本にいる時は物資を送ったり、バングラに行く時は文具を持っていったりするようになりました。できる範囲で支援活動をするようになりました。けどだんだんと、もつ

と何かできることがあるんちゃうかと思うようになりました。

映画の上映会をやったこともあります。「どこにこんだけ人が住んでるんかい」というぐらいの人がやってきました。

もうみんな朝まで見てました。アクションあり、ダンスありというインド映画を、ぼくらは見ても何にも分からへんねんけど、必死になって見てるんです。

バングラデシユは人口が多いんです。およそ1億7000万。ネパールで4〜5年関わってた頃は、ネパールの人はええなと思って見てたけど、バングラに行くといええな1の数がすごい。「もうこれはやっぱりバングラや」と思うたんです。それからもうバングラにずっと関わってます。

ぼくがバングラに行くきっかけになったムキットが村に帰る時に、ぼくらも着いていたりしました。毎年帰りよったから。その時に村に学校を建てたい、という話になったんです。

それまでは、ぼくは個人的な、できる範囲でいろいろやってたけど、ムキットの言葉

から活動をさらに進めて、あちこちの学校の補修とか、里親制度もやるようになった。ほんで、そうしとる間に、寺子屋もほしい、いうことで寺子屋も建てたんです。そして学校建設を考え始めました。

一番最初にバングラデシユの村に行った時に、ムキットの家でお手伝いしとったルジナさんとも知りおうてましたな。いろいろ手伝いに来て、ご飯作ったりとかな、やってくれた。そういう人がいてくれるのも、活動を広げやすかったです。

ムキットはボロレカ村に帰って、村ではとくに何ってやってなかったな。それまでに稼いだお金でゆつくりしとった感じやな。それに村にいてたらいでたで、それなりの仕事はあるから。バングラデシユ人を海外へ送り出す仕事とかね。正式な仕事として、バングラデシユはあるから。そういう海外へ行った経験のある子は、まあ、中近東が多いんやけど、サウジアラビアへ行くんやったら、いろんなことを手配しますよ、とか。今もそうことをやってると思う。

自宅を売って鑄物会社へ

バングラデシユに行き始めるちよつと前になるかな。枚方にHIKIIVAヒキバという国際協力活動をするボランティア団体があつて、ある時、事務局長の梶田さんと話をする機会がありました。

ネパールにはあちこち、何度も訪れていたんでこんなことを言ったんです。

「ぼくはちよつとネパールに関わってるんやけど……。何回もネパールに行つて、知り合いもおるし、ネパールでちよつと学校を建てたりとかそういう活動をしませんか？」
そしたら「ほんならやってみよか！」となつて、ぼくもネパールでの学校建設に関わつたんです。

その経験があつたので、バングラデシユでも学校を建てることはできるなと思ひました。ただ、お金がない。

そこで、家を買りました。

バングラデシユで学校を建てるために、枚方の家を買つたんです。建て売りの家で、28か29歳くらいの時、運送屋をやり出してから買ったんやけど、まだローンが残つてました。せやけど、バブルが弾ける前くらいの、一番いいタイミングでした。ローンを清算してもまだ300万円くらい残つたんです。

嫁さんの許可なんかなし。事後報告でした。

「この家売ったから、今日からわしらのもんちやうから……」つてな感じです。

今、振り返ると、ぼくは転換期の時はええ方に回るんです。そう思います。

住むところがなくなつたから、HIKIIVAの梶田さんに相談しました。梶田さんは、枚方の鑄物会社で長年仕事しotta人なんです。その会社は社宅もある。家を失つたばかりにはうってつけで。それで梶田さんの口利きで、鑄物屋さんで働くことになりました。住むところさえあつたら職種は何でもよかつたんです。

まあでもそうは言つても、鑄物屋いうたら3Kの職場です。金属を高温で溶かすんですから熱いしきつい。せやけどね、日本で働いてるバングラデシユ人と同じような気持ち

ちになってね、出稼ぎにきてるような感覚で仕事しました。稼いだお金はみんな向こうで使ったらええ、そう思っていました。

そやからね、言うたら悪いんですけど愛社精神みたいなものは全然なかったです。出世したいなんて思いはなく、逆に役職がついてもたら困ってしまう。だって年に1か月は休んでバングラデシュに行きたいんですから。

会社で友達はつくらない。もう徹底しとかと。同じ職場で仲よくなって、仕事終わってからも飲みに行こかとなって……、ほんなら休みにくくなりますからな。

そうして日本での出稼ぎ生活が実を結び、1996年1月、バングラデシュのポロレカ村に仮校舎で学校が開校。同時に新校舎の工事がスタートしました。

広島県三次市との縁

鋳物会社の社宅の裏に関西外国語大学の寮があつたんです。ある日、そこで暮らすリカちゃん、マキちゃんと知り合った。リカちゃんは丹波市の出身で、梶田さんのお母さんがいた施設でボランティアをしていた縁で知りおうたんです。ほんで「篠山出身のおもういおっちゃんがおるから、一回遊びに行つてみ」言うて紹介してくれて、遊びに来たんがきっかけでした。

ほくはその時50くらいやったけど、大学生とよう仲よくなったなと思います。ほんでリカちゃんが連れてきたのがマキちゃんでした。1995年の阪神・淡路大震災の時も一緒に長田へよう支援に行きました。

そのうちバングラにも一緒に行くようになって、マキちゃんは国際協力機構の関係で現地で働いていた日本人と出会って結婚してね。

その後、マキちゃんが地元の広島県三次市に帰って、バングラの支援活動をやり始めたんです。支援グループをつくって。それでね、スタディツアーをやることになりました。2003年には三次市の中学生を連れてバングラデシュに行きました。地方の中学生がバングラデシュに行くというのは、なかなか珍しかったんちゃうかな。それから何度

か三次市とスタディツアーをやっています。

今は、リカちゃんも地元に戻っていて、ぼくらの拠点「だいじょうぶ屋」からも近いのでたまに会えます。マキちゃんは三次市の市議員をやっています。彼女たちとの出会いは、ぼくにとってはもちろんですが、二人の歩みにも大きな影響があったと思います。

妻と別れ、会社と別れ

バングラデシユを訪れてから、ぼくの人生は本当に大きく変わりました。

バングラデシユじゃなかったら、しんどい仕事で稼いだお金を援助したり、家を売ったお金で学校を建てたりすることはなかった。それまでのぼくの歩みを見ればわかります。ふと、なんでそのままネパールを支援を続けなかったのかなと考えたことがあるんです。旅行も楽しみながらサポートもするような。

確かにネパールは面白かった。山も美しいし、人も優しい。けど、バングラデシユに

行った時には、一気に何かが変わったんじゃないかと思っています。

ネパールは母親が誘ってくれて始まった旅でした。けど、バングラデシユはぼく自身を選んだ道でした。向かいのアパートに住んでた男たちとの出会いから始まった。ぼく自身が選んだ道やった。それが大きかった。

でね……、56歳で離婚しました。26歳で結婚しましたから30年一緒にいました。愛想尽かされた、ということもないことはないかもしれませんが、スタディツアーが縁で出会った啓子と結婚しようと思ったんです。ほかに、彼女もいてたんですけどね。そんなみんなやめて、啓子とやっていこうと思ったんです。ひらめきでしょうか。

ほんで再婚して、それから1年ほどで今度は会社を早期退職しました。ここでもなんか、行き当たりばったりとか気ままでしょう。

会社が希望退職を募ったんです。ぼくは途中入社やからほんまやったら退職金なんてしててる。300万くらいのもんです。せやけどこれは会社都合。鋳物屋やから撤退しよかという話で、その部署だけや。せやから、会社自体には体力がばっちりあったわけ

よ。ええとこ300万、てのが7、8倍に化けたんやからラッキーやっただす。それで憧れのハーレー買いましたからね。そこも好き勝手なぼくらしいでしょう（笑）。

第四章 啓子の半生

あんただけあかん子

わたしは1949年2月23日生まれです。年齢は同じですがお父さん（八司）は篠山やっただんですけど、わたしは春日町（現・丹波市春日町）やっただので、一緒やったこと

がなかったんです。実家は衣料品店をとりました。田舎の服屋ですわ。お父さんお母さんがやってて、大学時代からわたしも手伝いをやりました。

姉と妹がおります。三人姉妹の真ん中です。仲ようやってたかいうたら、あんまり仲のいいことはなくて、上からもこんな言われて、下からもこんな言われて、わたし、挟まって。一番なんか、自信のない子でした。

お姉ちゃんも頭がええのに、あんたはあかん。妹も頭がええのに、あんただけあかん。あんただけ不細工や、つてずっと言われて。で、あんただけ変わった人間やて、ずっと言われて大きくなりました。

自分ではそんな思ってたんですけど、そんなこと言われ続けとつたら、ああ、わたしは変わった人間なんやろうと思うようになってしまいました。

隣におばあちゃんのうちがあったんです。で、わたしはおばあちゃんに育てられてばかり。そしたら先生が言うの、「あんたは変わった子やから、おばあちゃんに育てられた。あんただけ変わっとんねやて」

ちっちゃい頃からずっとそんなこと言われてきました。

今やったら親がアホやと思うんでしょうけどね。その時はもう親の言うことがホンマやと思いますねん。あー、自分は変わった人間なんや思うて。なんか周囲に気ばっかり使うてね。

あいさつでも、いつあいさつしたらええんやろ、先生にもいつあいさつしたらええんやろうって気ばかり使うて。で、結局あいさつせえへん。なんか心の中ではいっぱいあいさつしてるんですけど、そんなんで、だからずーっと小学校からもういじめられっ子でした。ほんまに先生にまでいじめられた。

今やったらそう思うけど、その時はそれがもう当たり前やと思とったさかいに。おばあちゃんは優しかったんです。おばあちゃんだけが優しかったんです。

体重との戦い

小さい地方の衣料品店なんか、まあみんな服買うっていうたらそこで買うっていう感じなわけです。折り込みチラシなんかを出したりしたのも地域ではうちの店が初めてです。春日せんいうて。

で、なんかまだ小学校の頃やっただけど、授業中でも春日せんいうて言われて。先生が言うてんです。ほんだから、みんながワツと笑いよったっていう。初めてチラシ出したりしとったさかい、ちよつかいかけられるというか。

高校は丹波篠山の柏原高校の普通科です。進学コースで、大学に行こうと思とったんです。ところがね、勉強したふりして、ラーメンばかり食べて食べて食べて。夜食にラーメン食べてどんどんどん太っていったんです。

中学3年の時に貝原高校進学のために勉強せな思うて、ほんでまたラーメン食べて、夜

食にうわー食べて食べてして、で、またどんどんどんどん太っていったんですよ。

その頃で70キロまでなったんです。それからまだまだ増えて、大学入った時くらいかな、最高82キロありました。

それでやっぱり、若い時に肥えとるというのは劣等感になるわね。わたしは、変わった人間なんやと思つて。上も下も別に肥えてるわけじゃなかったんです。肥えてません。わたしだけやったです。

大学は甲南大学の法学部です。文学部行きたかったんですよ。文学部か英文科か。せやけど、「いかんー」言うて。法学部しかやらさへんつて言われたんです。

あんたは不幸やで、一人で生きていかなんから、そういう法律関係のところに入つていたら就職は大丈夫やからええわつて。

女の子が少ないんですよ、法学部は。ほんでね、また文学部の子やったらモテるんや。法学部やったらね、「法学部の女は嫌いや」言うて、男の子から声かけられへんのやわ。

わたし朝4時に起きて、電車乗って神戸まで出て。本山の駅からずっと歩いて。よう歩いたね。ほんで途中におうどん屋さんありますやろ？ 必ずそこに寄つて、おうどん食べんねや。ほんでまた歩いて。食べることだけが楽しみやつたと思います。

4年間、そうやって早起きして通つてました。アルバイトもしてたんですけどお金は持つてへん。店の手伝いですから。無給でした。

家業と借金を継ぐ

大学出ても、就職先みたいなのはなかったんです。就職は大丈夫やからって法学部にされたのね。だからもう家の手伝いしてなんぼやつたです。それから父親も亡くなつてしても。

お父さん亡くなったのはわたしが27ぐらいの時でした。59歳で亡くなったんですよ。若

くして。ほんで、お父さんが借金まみれやった。お金を返していかないかんいうんで、お母さんとわたしと、あっちこっち借金したところを払うてまわって大変でした。

大学出て親の店で働いてて、出ていけ言われたこともあったけど、出ていかへんかった。出ていくとこあらへんしね。「わたしがやる！」言うて。姉も妹も結婚して家出てましたしね。

お見合い100回の日々

田舎のことやから、近所の人とかがいろんな縁談を持ってきてくれはったんです。月に3人ぐらい会うてる時もありました。結婚する時に、「結局お見合いは何回したん？」て聞かれて、わたしは「100回ぐらいしてる」と答えました。期間が長いもん。33歳から始めて、55歳まで。20年以上やから、そら100回ぐらいはしてるやろうと思えます。でも100回お見合いしても、ビビツとくる相手がおらんかったんです。

そして56歳の時に突然、八司さん（今はお父ちゃんて呼んでます）に言われたんです。「わし、あんたと結婚するんじゃ」

「え？何？」と言うてる間に、もう結婚するのが決まっとった。日取りまで決まっとったんです。

お父ちゃんとこのお義母さんは、わたしが通ってた高校で先生をしてたんです。縁があつたんです。わたしは、いじめられたりして悩んだ時期もあつて30歳の時に洗礼を受けました。家族には猛反対されたんですけどね。ほら、お義母さんはクリスチャンでしょう。そういうこともあつて顔を合わせるようになって。ネパールの人が家に来てたりね、支援活動をしてたりね、そんなんを知るようになったんです。

それである時、「バングラデシユの活動は面白くなると思うよ」ってお義母さんがわたしにすすめてくれました。そういうことがあつて2003年やったかな、スタディツアーに参加しました。ほんで里親にもなつて。P・U・Sの会員としてお父ちゃんの活動を応援してたんです。

でもそこから交際してとか、そういうことじゃないんですよ。お父ちゃん結婚してましたし。恋人もおつてやつたんです。

本当に突然、結婚する言われてね。その時は80キロぐらいありましたかね。細い人ばっかりやったから今度は太いほうがええわという感じやつたんですかね。なんやなんや言うてる間に結婚式やつたです。お父ちゃんはいスラム教徒やつたんやけど、クリスチヤンになってくれはって、教会で式を挙げました。

第五章 新たな支援の歩み

再婚の決断

啓子と結婚してもう20年近くになるかな。結婚したのも行き当たりばったりというか、思いつきというか。啓子はぼくの母親の教え子でもあるから、そういうつながりでP・

U・Sの会員になってくれとつたんです。その集まりでね、この人と結婚しようと思っ
たんです。妻も恋人もいたんですけどね……。

結婚してすぐかな、ぼくが仕事があったりしてバングラデシュに行けなくて、一人で
行ってもらったんです。啓子は一人で海外出かけるというのは、なんともへっちゃらな
んやな。それでどんどん行ってもらうようになった。

ついでに、いろんな国見とくのも勉強になるからって、タイとかマレーシア、ベトナ
ム、カンボジア、ラオスにも行った。帰りもほんならこの国寄つたらとか言って。

ぼくの母親はクリスチャンやったけど、ぼく自身は宗教に興味なかったです。けどバ
ングラ支援してるから、一応イスラム教徒的な振る舞いをしてたわけです。もうそれは
郷に入れば郷に従いやから。

ほんで髭も伸ばしかけたんですよ。そこそこの年齢になって髭もないぐらいやったら、
もう子供扱いされるとあるから。ほんなら伸ばそうかって。

すべて郷に入れば郷に従え、モスクも行き、ほんで村のおっちゃんらがイスラムの名

前つけたるいうからつけてもろて。ただまあそれは表面的だけのことで、ほんまのなかイイスラムにはな、なつてないけども。まあ自然とちよろつと、ほんまごくわずかやけど、お祈りの言葉も覚えてくるわな。

で、今度啓子と結婚してまた郷に従ったわけ。嫁さんがクリスチャンならばくもクリスチャンになったら喜ぶかいなと思つて。何の抵抗もなかった。母親には影響されへんかしても、啓子には影響されるわけね。

でもそれがあつたからアーサー・ホーランドという人と出会うことができたんよ。

不良牧師をサポートする

聖書ばかり売ってる本屋さんで、アーサー・ホーランドさんの著書『不良牧師』の表紙を見てちよつと惹かれた。それがきっかけで、講演を聞きに行つたんです。

アーサーさんは、ほんまにすごい人でな。1992年に新宿アルタの前で路傍伝道のスタイルを始めて。それから十字架を担いで日本列島を縦断したんです。その後は、台湾やアメリカや各地を十字架を担いで歩いてる。

この人は元々、全米チャンピオンまで行つたレスリングの選手でな。ムキムキのアスリートみたいな人で、半端ない強さなんです。けど、むっちゃ優しい人でな。困つた人の目線で見てるんです。

任侠のやくざが、どんどん経済活動をし始めて、任侠を忘れていつて。その頃、残侠つていうんですけど、任侠のやくざの任侠の部分だけを切り取つて、それを布教活動にしたんが、アーサーさんなんです。腕つぶしやら何やら、ついてきたから、やくざからも絶大な信頼があつてな。口ばかりやらないな、こいつほんまにやりおる人やなつて。

台湾を歩いてまわつてきた時の話がすごかつたな。歩きながら3日目に、足の裏にでつかい水ぶくれができて、それが潰れて、そのまま歩ききつたつて。「小指、縁故つめるほうが楽やろ」つていうてはつた。

当時サポートをずっとしとった人がいてな。ほんでその人が引退して。フリースクー
ルをやってて、教育者やったから、勉強を教えなあかんから。そん時にぼくが洗札を受
けてな。ぼくがアーサーさんのサポートに入るようになったんです。アーサーさんが歩
いてるのを車で先導したり、宿泊先を探したり、食事を準備したりとかな。

まあ、歩いてる意味いうかな、そういうのがわからん人なんやってんだけど、なかなか
わからなかったんよ。歩いてても。もう毎日毎日が、1年、2年、3年経って、こんな
こと、ぼくはだいたい今でも聖書読まんから。

もう体験学習のみやる。ほんなら一年に一回は歩く聖書という感じやから。聖書を読
んでも読んで理解するような頭ちやうから。

アーサーさんとはほんまに不思議な出会いやったんです。十字架を背負うて日本全国
を歩いてはる人で、今でも病んだ人とか、一緒に歩きたいという人が結構ようけ来はるん
ですわ。YouTubeとかで情報を得て、来る人もおるし。

その人らは1日おったりとか半日おったりとか、ちよろつと来て帰る人もおれば、朝
から晩まで一緒に歩く人もおるし、まあそれが布教というか、活動になつとるわけです
な。

ビジネスホテルみたいなところを探しながらずーっと、だいたい30キロずつ前に進ん
でいきます。もう好きでやってる感じですよ。組織の枠の中で動くタイプとちやうから、
もう自分は自分のやり方でやると。

資金はほとんど支援者みたいな人からの寄付ですな。もうそれでずーっと、30年
も生活しながら。ぼくと共通したところがあんねん。なんとかなるいうかな。

信念を持って、ずーっと長年やってたら、応援してくれる人というのは不思議とどうし
ようと思った時にはなんとかなんねん。それは普通はもうそういうこと長年体験した人
でないとは分かんないと思います。

エルセラーンと学校建設

エルセラーン化粧品との出会いも、たまたまやったんです。神戸新聞にぼくらのことの記事が載ってね、それをテレビ局の人が見つけて訪ねてきて。まあ、その週イチの番組やったからどんだん探してこなあかんやろしな。テレビ大阪の「石橋勝のボランティアA1」という番組です。エルセラーン化粧品の一社提供番組やった。

ゲストとして啓子とスタジオに呼ばれました。そこでエルセラーンの常務の人が来て「お付き合いしましょう」って。その時はまだエルセラーンがどういう会社かまったく知らなかったです。声かけてきて、結局は詐欺みたいな話やったことがよくあったから「またやな」と思うとったけど、付き合っただけで、わかってな。今となっては、ぼくらがバンングラで建てる学校のほとんどがエルセラーンの支援のおかげです。

エルセラーン化粧品は、ベトナムとかネパールとか、いろんな途上国で学校建設をしてるんです。学校には優秀な販売員の人の名前をつけたりするんです。その活動のために、それぞれの国の支援をしている団体とパートナーシップを結んでる。ほんでぼくらはバンングラに学校を建てるのに一緒にやっていこうとなったわけです。

最初に建てたクマサエルという村の学校は小さかった。屋根がなかったんです。当時はまだ予算も少なかったし。難しいこともいろいろあった。それからもう少しできることが増えて隣り村のパラトールに学校を建てた。ここは立派につくったから、じゃあうちもやってくれよということになって、後にクマサエルにも屋根をつけて窓をつけた。

コロナ前はだいたい年に6校は建てとったけど。今年は4校かな。ほんで来年ももうこの間打ち合わせして4校かな。

開校式には必ず行くようにしています。ダツカからバスで行って、まあもう忙しいツアーで。疲れるんやけど、1日で午前中と午後、開校式やるとか。盛大に歓迎してくれるんやけど、なかなか時間がたつぷりでな。炎天下のなかでとなるとハードなんですわ。

石田くんとたかちゃん

シンガーソングライター石田裕之くんは、もともとおじいちゃんが篠山に住んで、篠山の障がい者施設のテーマソングを作っていました。篠山にファンができて、篠山でよう歌うようになりました。

一番仲よくなったのは東北やねん。東日本大震災の時、ぼくはすぐに東北、宮城県に行ってたんです。それで石田くんにも声をかけました。その頃の石田くんは、神戸大学に行って、環境のこととかやってたから、難しい話をする子やな思ってたんです。あんまり冗談も言わなかったし、しゃべりが硬かった。

せやけど、東北行ってボランティアをして、熊本地震の復興支援にも一緒に行って、バンガラに行ったら、もうやっぱり話の内容がもうすぐ変わってきたんです。体験すると違ってくるんやな。コンサートの時にバンガラの紹介もしてくれるけど、自分も行ってやる。そやから説得力が出てるんやろうと思います。今でも石田くんは石巻に行ってるし、たくさんのファンができてます。

たかちゃんこと丸山貴史くんと最初に出会うたのは啓子でした。その時、ぼくはアーサーさんのアメリカか日本縦断の時かで、どっか行っておらんかったんです。

たかちゃんは痩せて暗い子やったんです。その時、会社を経営していろいろあつて一番落ち込んでる時期でした。大阪から地元、兵庫県の西脇に戻って、そこの生活も嫌になって、死を考えるほど追い詰められたこともあつたようでした。それで篠山に引越してきはったんです。

そんなたかちゃんに、いまでは本当に助けてもろてます。啓子がバングラデシユで転んで骨折した時も一緒に行ってくれた。一人やったら大変やったと思います。銃を突きつけられた時もありましたし。

たかちゃんは黙々となんでもやってくれます。よう考えてな。ああいう子でない、バンガラに行ったり来たりとか、ぼくの後をやるのは無理やと思います。

頭がいいだけではあかん。バンガラという国に行ってもへっちゃらというか、衣食住

何でも別にへっちゃらでできるといのが一番大事な条件の一つやねん。毎日お風呂入らなあかんとか、そういう子ではないから。

その生活に対応できる人が、ぼくは一番最適や思うねん。

2015年の脅迫事件

バングラデシュでの活動に暗雲が立ち込めたのは、いまから10年ほど前、パラトール村での出来事やなあ。パラトール村は、ポロレカ村から車で1時間ほど行ったジャングルの中にありました。隣りがはクマサイル村。どちらもカシヤ族という少数民族のクリスチャンの村でした。

周りはムスリムが多数派です。地元の警察官も役人もムスリム。そこに、わたしたちが少数民族のクリスチャンの村ばかりを支援していることへの妬みがありました。「なんで少数民族？ クリスチャンやんか」と。敵同士みたいなもんやったんです。

啓子とたかちゃんが日本からのスタディツアーの準備でバングラデッシュに入りました。たかちゃんはこれが初めてのバングラ。この頃はムキットとの関わりもなくなって、自分らで全部やってる感じでした。ホテルの手配、移動用の車の手配。やることはたくさんありました。パラトール村には、ぼくたちが支援している里子がありました。毎年、奨学金を届けに行かなあかんです。そして、ぼくが約20人の参加者とともに日本を出発するところやったんです。

そんな時に、村から電話がかかってきたんです。「来るなよ」と。

ぼくらは最初、深刻に受け止めていませんでした。理屈がわからなかったし、何でそんなこと言うんやろと不思議でした。まあ言うただけやろと。

でも違った。啓子とたかちゃんがパラトール村へ向かう途中、警備隊に、銃を突きつけられたんです。

「出ていけ」

日本人が入ったたらあかんとこまで、ぼくらは入っていったんです。後から聞いたら、外務省が「行くな」って言うくらいのところやったそうです。

パラトール村では泊まったらあかんで言われました。隣のクマサイル村で泊まろうとしたんですが、そこもあかん言われました。でもこっちもツアーをやめるわけにいかない。

啓子らがいよいよスタディツアーの開始のためにボロレカ村に入ったとたん、電話が鳴りました。「来るな！」。これが何回も続く。

たかちゃんは「ほんまに、やばいやんか」と心配していたそうですが、啓子は「行ったらわかってくれる」と、そのまま進んだそうです。樂觀的なんです。

村に着くと、脅迫文を見せられました。普通はベンガル語で書くはずなのに、その脅迫文はわざわざ英文で書かれていました。ほくら日本人にわかるための文章やったんです。んー、村長も含めて、利権とかあれこれあったんかな。突然、態度が変わったし。とにかく異常でした。

啓子とたかちゃんはが、ダツカの日本大使館まで駆け込みました。

「こんなことされてんだけど、こんなんじゃ支援が続けられへんから、何とかパーミッション取られへんかな」

なんとかスタディツアーをさせてもらえるように、村の人に頼んでほしいと相談したんです。大使館が動いてくれて村のほうに「危害を加えるな」と電話をしてくれました。そしたらコロッと変わって、村の人らがスタディツアーの警護をすることになったりしてね。どういうこっちゃ。まあやつとツアーができることになった。

それまで、なんとかうまくやれてたんです。もちろんお金取られたりとかはあったんやろうけど、形としては学校もできていくし、支援もできてるから、うまいこと回ってたわけです。それが全部ひっくり返ってしまった。

やれやれと思ったら啓子が足を踏み外して股関節を骨折。ぼくは参加者とスタディツアーに行つて、啓子はたかちゃんの付き添いでダツカに戻つて入院。その後、タイのバンコクまで運ばれて……。

支援の仕方、人との関わり方、さまざまに考えることになりました。でもね、面白いもんで啓子がダッカで入院している時に出会ったのがマスッドさんで、日本語ペラペラ。会社を経営していてスタッフもできた人らでね。現地のエージェントになってもらいました。それからダッカ郊外の町をメインに学校を建てるようになって、事務所もできて、大きな転換点になりました。たかちゃん「洗礼を受けた」て言うてましたけど（笑）。

バングラデシュの変化

85年から比べたらどうかって言われたら、まあやつぱり物があふれるようになった。店も増えたわな。それだけやつぱり店が増えるいうことは、みんなちよつとずつでもやつぱり収入が増えてきてるんやなと、いうことは感じるわな。ゆっくりゆっくりやけどね。昔はもうぼくは行ってた村でも向こうから端から端まで見通せたけど、もう最近ではもうちよつとした店なんやけど、どんどんできて、まあ店だらけになっているようなつ

ていうことは、やつぱり購買力、売れんかったら店やつてもあかんでな。それだけ収入自体もちよつと上がっていったんかなと思ってます。

最初にバングラデシュに行った時から今まで、基本的な印象は変わりません。同じです。せやけど親の考えが変わってきたというのがあります。

昔はそもそも子供はすべて労働力いうことしか親は考えてなかったです。だけど今はこの親も自分らが一生懸命働いて子供に学校行かそうという気持ちが出てきてる。やつとそこまできたという感じやな。

だんだん学校は行ってこい言うようになってきた。ぼくらが学校建てたのがきっかけにもなってるね、そんな風が変わってきました。女の子の親でもそう言うようになってきたんです。ありがたい。ほんまに学校なんか何の意味もない言うて、最初は言いよつたつただけね。自分らも出とつてないもんで。

やつぱり最初に出会った子がもう大きくなってきてるわけです。女の子でも普通に働いてる人もいます。学校を出て。日本に来たりもあるもんね。

男性社会からの脱却

バングラデシュの男の人は、市場がたまり場みたいなもんです。どこの村に行ってもバザーみたいな、野菜から魚からみんな売ってるところがあつて、そこでダラダラダラダラしゃべってるんです。

もうみんな顔見知りばかりやから、いろんな話をしたり、市場のスペースを借りるとかの仲介に入ったりとか、場所借りてる人の集金をしたりとか、そういう仕事をしてる人もおられます。

市場で野菜を売ってる人も男です。それがイスラムの世界のようで。ネパールとは違います。ネパールは女の人が歩いてるし、市場で野菜売ってる人も女の人やもんね。

バングラデシュでは町中を歩いてても女の人がいてない。男ばかりです。男同士で手をつないで歩くのは問題ないんやけど、男女が手をつなぐというのは絶対に許されへんです。

そんな男優先の社会では、当然、女性や子供の地位は低いです。

児童労働なんかはどの職種でも、過酷な環境です。向こうって革製品が結構あるんやけど、その革をなめす時に薬に浸けたりするでしょう。そんなとこに裸足で素手でほんで、その廃液は川に垂れ流しとか。今の時代にもあるんです。

たかちゃんがそういうとこをずっと回って、日本の人らに知ってもらうために映像を撮つとったけど、追り返された。行っても喧嘩になる。労働者も経営者もそんなとこ映してほしないわけや。

子どもたちが働かざるを得ない状況は、まだまだ残っています。親の意識は変わってきたけど、貧困がそれを許さへんこともある。教育支援を続ける理由は、そこにもあるんです。

女性については、ぼくが生きてる間に社会進出が先進国並みに進んでほしい。ダッカあたりはな、オフィスに勤めたりとか、航空会社に勤めたりしてる女の子も多いんやけど、村のほうに行くともだまだやな。そこには宗教的な壁もあるんやけど。

女の人も学校の先生にはわりとやりやすい。ぼくらが関わってる学校はほとんどが女性や。校長先生もそう。でもそれは、それだけ先生という職業に社会的な地位がないってことでもあるんです。男でも、もう何にもない、やることないから先生でもしようかという人はいます。

親が結婚を決めるケースが多いですね、結婚する時の持参金は女のほうが多いんです。嫁ぎ先ではね、持ってきた品物をノートに記録するんです。嫁が何を持ってきたか、鍋を持ってきた、包丁を持ってきたとか。持ってくるもんが少ないと、嫁ぎ先でいじめられるわけです。

一番はよう働く子。特に男ばかりの家族やったりすると早いこと女手がほしかつたりする。そやから女の子の持参品で必須なのは、「ふいぐ」。竹でできた吹いて火を興す道具です。あれは絶対忘れたらあかん。それを持って行かんかったら、料理ができひん女やって思われる。

そういうのはあんまり変わってないけど、そこに勉強をしてる子でないとって風潮が出てきてる。女の子の親も縁談に響くからせめて学校くらいはとか考える。

女子の学校に特化するようになったのは、やつぱりそういう部分もあるわけよね。そやから今その里子は全員その女子中学や。まあ、そうやって、その女、その子に支援してたら、その子を嫁がせんよみたいなことが抑えられるってことやんな。ある程度は。絶対とは言われへんやけど。お金がもらえるんやでっていうことになるわけやんな。

で、その学校をちよつとレベルアップしよう思てんねん、言うてたんやけど、ほんならもつと意識が変わってくるかなと思つたんや。村からちよつとやつぱりレベルを上げようなな。

まあ大学行く子が出てくるとか。なんか目先のお金をもらうより、いい学校、稼ぐ、高校とか大学出ていいとこに就職する、教育に力入れる方が将来的にはいいんだよつていうことをちゃんとわからさなあかんから、そういう意味では教育の意識っていうのは上げていかなあかんという。

時間はかかると思います。親の意識が少し変わってきたなと感じるまでに30年以上か

かっつんやから。

せやから、女の子がどんどんどんどん村でもどこでも進出できるようになるのはまだそのぐらいはかかると思う。けれども、ぼくはもうこの活動で、もう最後の目標はもうそういうことをずーつとやっててな。

で、村の女子の教育をレベルアップ。村から、アップしていきなと。都会と村ではな、まあ経済格差もひどいけど教育格差もひどいから。

あとがき

バングラデシユの支援を続けてきて、いやあやってよかったなって思うのはもう一瞬ですね。その一瞬の喜びのために続けられてるのかなと思います。学校に行つて、歓迎されたりとかいうのは、またか、もう長いなとか思つてしまふしね。いや、ありがた
いんやけど、ちよつとね。

せやけど、ある日、村の方を歩いとつたら声をかけてくれた親子連れがおつて、「私はあなたが建ててくれた学校の卒業生です」つて言うんです。ほんで今は結婚して子供も生まれて、「この子にはなんとか教育を受けさせたいと思つてます」と。そういう出会いというのはやっぱりうれしいな。

いろいろ種を蒔くというのは、それがどつかで腐る種もあるかしらんけど、花が咲いてくれたんやな思てな。そういう一瞬、一瞬です。

つい最近もアメリカの人がぼくの活動を知ってくれてな、ぜひ寄付をしたいというこ
とで、ちよつとアメリカに行つてくるんです。急な話やつたんやけど、とにかく一回会
つとかんと悔いが残りますから。

結構大きな金額で。会つたこともないのにやな。もうぼくはだいたいあんまりメール
だけでは済まさんから、手紙書いたりとかな、電話で話したりやからな。

つながりやからな。それが不思議なつながりができるのかな。まあ、いろんなずー
つとその同じことやり続けてたら誰かが見てるんや。ほんならその人が誰かを紹介して

くれたりとか、いろんなつながりあるからな。

だからやっぱり一つのこととはやり続けておかないかなとは思うな。金があつてもなかつてもな。人のつながりやもん何でも。出会いから始まるからな。

途中で諦めたらな、なんぼいいこととしても終わりやもん。動いたら何かが起こる。

ネパールによく行つとつた時、母親はまだ60代やったけど、大正生まれの人でそんな熱心な活動してるってすごいなと思った。いまだにおばあちゃん連中に「あんたのお母さんには世話になつたんやで」って言われます。

母親に誘われて海外へ行きました。それからや、変わったのは。ちよつと日本を離れてみたらこんな生活しとる人がおるんやなと思った。何か始めようと思いました。啓子という伴侶とめぐり会えて、歩みがさらに前へ前へ進んだ。迷惑かけた人もようけおるけど。でも、まだまだやることはあります。女子教育、村のレベルアップ、奨学金支援……。やっぱり動いたら何かが起こる。それをずっと信じてやってきた。これからも、種を蒔き続けます。

ボンクラ夫婦のバンクラ日記

岩下八司（いわした・やつし）

1949年兵庫県篠山市（現丹波篠山市）生まれ。NPO法人P.U.S. JAPAN理事長。1985年に初めてバンクラプロジェクトを訪問以来、現地の支援を始める。1996年からは学校建設を本格化し、2024年時点で47校・約3万人の生徒を支援。現在も、お金がなくてもなんとかなる。を信念に「感・即・動」で活動を続けている。

岩下啓子（いわした・けいこ）

1949年頃兵庫県丹波市生まれ。56歳で結婚し、夫・八司とともにバンクラプロジェクトの支援活動を行う。また、丹波篠山で自身が買い付けた衣料品の販売やバンクラプロジェクトを提供する「だじょうぶ屋」を運営し、教育支援の資金確保を計っている。

発行日 2025年12月25日 初版

著者 岩下八司・啓子

発行者 藤原武志

発行所 株式会社藤工作所

〒555-0011

大阪府西淀川区竹島5-7-4-2F

TEL 06-6472-0606

E-mail info@fujinokshop.jp

落丁・乱丁の本はも取り替えます。

©Yasushi Iwashita, Keiko Iwashita 2025

ISBN978-4-908456-04-6 C0036

編者より

知人から、バングラデシュ支援をしているおもしろい夫婦がいると聞いて会いに行きました。大阪で資金集めのためにバザールのようなことをしていただきます。服装も派手だし、篠山から乗ってきた車もド派手にペイントされてるし、妙にこにこしてるし、けつたいな夫婦やなと思いました。

本を出すことになったのは、たかちゃんをはじめとする八司・啓子ファンたちが望んだからなんです。「面白い話ばっかりやから」「すばらしい活動をしてはるから」「二人のことを世に広めてほしい」。

そうして篠山のだいじょうぶ屋に通つて、話を聞くようになりました。確かに興味深いこと、笑えること、エピソードいっぱい。それをそのまま書いてもらったら完成……、とはいきませんでした(笑)。八司さんも啓子さんも、目の前のことに一生懸命。過去なんて振り返つてられない。だから、話が断片的で時系列があわない。学生時代のこと覚えていても、いつどこの国でなにをしたかは曖昧。こりや関係者にあたつていつて、一つひとつ調べていかないといけない。でも、二人の魅力つて、前に進むのみの姿勢、細かいことはええから！つて生きてるところかなと思ひ直して、ぐちゃぐちゃつとしたまま1冊に詰め込みました。

いざ制作という段になってわたしが体調を崩してしまい、スタートから2年以上の歳月が流れてしまいました。楽しみにされていたみなさまにはほんとうに申し訳なく思っています。

途上国支援というと、なんだかかすきな、感動的なエピソードが出てきそうですけど、八司・啓子はそんな人たちではありません。ここで書けなかったことがまだまだあります。たまえられたり、カモられたり、たまにうまいことやつたり。ボンクラなんですけど、いつも最高の笑顔で丹波篠山とバングラデシュを行つたり来たりしています。